

「経験科学」としての宗教学の功罪

— 天理教学との関連において —

松 本 滋

(昭和30年卒業)

1

今年(昭和61年)の4月、『増野鼓雪の信仰と思想』(西山輝夫著、善本社)という書物が、「限定出版」の形で刊行された。一般には余り知られていないが、これは天理教の教学及び思想の歴史の中で、非常に重要な意味をもつ書物である。

鼓雪は本名を増野道興といい、明治23年、教祖の高弟の一人増野正兵衛の息子として生れ、20代で早くも頭角を現わし、29歳という異例の若さで天理教会本部役員に登用され、以後15年間に目を見はるような数々の業績を残し、昭和3年11月、39歳という盛りの年に世を去っていった。

天啓者を失い、沈滞した大正期の天理教団に、再生の息吹きを与えたのが、この増野鼓雪である。行

政面での手腕も素晴らしかったが、それ以上に信仰・思想面においてもたらした影響は計り知れないものがある。今日でも、彼の論著、講話の語録は、求道的な天理教者の心魂の支えとなって生き続けている。

ところが、それほど的人物が、この50年余り、教団の表面では殆ど無視され、いわば葬り去られて来た感がある。上記の出版物も教団の公的機関から出されたものでなく、また昭和の始めに出た『増野鼓雪全集』全23巻は、再刊への希望が多いにも拘らず、何らかの理由で今尚陽の目を見ないままなのである。(序でながら、もし古本屋などで見つければ、小生に即御一報頂きたい。)鼓雪は、単に忘却されているのではない。何らかの力によって「抑圧」されているのだ、と私は見ている。

2

何故、このようなことを『年報』に書くのかというと、鼓雪が教団内部でいわば「影」の部分に追いやられている原因の、少くとも一部が、東大宗教学の伝統的学風にあると思うからである。

昭和時代の天理教団を力強くリードしたのは、故中山正善二代真柱であった。この人物のスケールの大きさ、物を見る目の確かさについては、知っている方も多いと思う。昭和4年の3月、東大の宗教学科を卒業しており、岸本英夫、石津照塵、古野清人、大畠清といった偉大な先学先輩と極めて親しい間柄にあった。

正善真柱は、天理図書館、参考館、大学、「憩の家」総合病院などの文化施設を設立、拡充したり、柔道、水泳を始めとするスポーツ活動の振興につとめたりして、天理教の対外的イメージを高めることに大いに貢献した。が、同時に学問をこよなく愛し、学者研究者を厚遇すると共に、自らも天理教の「原典」を深く研究し、その公刊に力を注いだ。天理教の現在の教義体系は、殆ど彼の手によって整えられたと言っても過言ではない。

さて、先述のように大正時代をリードした増野鼓雪が没したのは昭和3年で、その翌年、中山正善が大学を卒業したということは、実に象徴的な意味をもつ。鼓雪路線から正善路線への転換がかくして始まったのである。

聞く所によれば、正善真柱は鼓雪が好きでなかったらしい。鼓雪もまた真柱と肌の合わないのを感じていた。二人とも偉大な人物だっただけに、その葛藤も根が深かったようである。今その両者の対立を、思想のレベルで分析するならば、鼓雪が神秘主義的、霊性中心的であるのに対し、正善は実証主義的、理性中心的であったと言えよう。

3

言う迄もなく、東大宗教学の伝統は、「経験科学」としての宗教学であり、岸本英夫の言葉を借りれば、「公開性をもった対象を、価値中立的な観点から取り扱う」ことによって、「宗教を実証的に研究する」学問である。言いかえれば、「どの研究者にとっても、実証的な観察が可能な対象」こそが問題であって、「実証的な観察を超えた」ものは、宗教学の対象とならない（『宗教学』3頁）。

この基本的立場の是非を今論じようというのではない。大事なことは、天理教の二代真柱が、東大の宗教学研究室でしっかりこの学風を身につけ、天理に持ち帰ったということである。彼は天理教の教理体系を打ち建てるに当り、教祖の真筆原本の存在する『おふでさき』を中心とした「三原典」を基礎とするという基本方針を打ち出した。現行の『天理教教典』は、この基本方針のもとに編纂されたものであるが、その作製過程に関与した主要メンバーの中に、上田嘉成、永尾広海、諸井慶徳、田中喜久男など、東大宗教学科出身者が数多く居たことも極めて意味が深い。

この教典は、明治時代に時の政府の意向にそうよう作らされた「旧教典」とちがって、教祖の精神と教えに正しく則ったものとして、昭和24年に刊行され、以来ごく一部の修正はあったものの、殆どそのまま今日に至るまで、天理教の教理として内外に示されて来ている。

それは確かに立派な業績であった。そしてそこには東大宗教学の学風が遺憾なく発揮されているとも言える。正善真柱はつねに言っていた。「教理を論ずる場合、必ず確実な資料をもとにして論ぜよ。原典にしるされていないような事を、勝手に論じてはいかん」と。小生も若い頃、この戒めを深く心に刻みつけたものである。

4

しかしながら、物事には何でも表があれば裏もある。光があれば影もある。一見、至極正当な編纂方針によって作られた教典ではあったが、そこには重大な欠陥もあった。しかもその欠陥は、東大宗教学の学的伝統のある種の「限界」と密接に結びついたもののように思われるのである。このことに気づいたのは、多分小生が最初であろう。教団内部では、中山正善二代真柱と言えば未だに絶大なる権威をもち、その残した教学上の業績にケチをつける者など殆ど居ないからである。

「重大な欠陥」と小生が言うのは、魂あるいは靈魂の問題が全くといっていいほど説かれていないことである。教祖ははっきり「心」と「魂」を区別して教えているのに、現行教典では心のレベルしか述べられていない。そのため肝心の「かしのもの・かりもの」の教理（身体は親神からの「かしのもの」だと

いう教え)も、「出直し」(死のこと)の教理にしても、主体が判然としない憾みがある。一体どうして、こういうことになったのであろうか。

私見では、これは増野鼓雪色の拭色を意図した結果であると共に、東大宗教学の実証主義的学風もたらした、思いがけぬ産物でもあった。

鼓雪は未だ「原典」が公刊されぬ頃——自分では読んでいたが——主として信仰者の霊性を開発することによって神に近づく方向を提示していた。そもそも霊や魂の問題は、いわゆる言い難く、文字に表しにくいものである。しかし、万人に観察可能なこと、あるいは合理的に表現されることだけでは、宗教信仰の世界が分るものでないことを、鼓雪はよく知っていた。彼は神秘主義の道を好んだのである。

これに対して、鼓雪以降の教団の動きは、正善真柱の指導のもと、次第次第に教理の合理化、体系化へと向った。原典の公刊、教典の作製は、信仰的に

も学問的にも重要な意味をもつ事業であったが、その反面、あまり合理的でない、「公開性」に乏しい魂や霊性の問題は、訳の分らぬものとして、鼓雪とともに伏せられ、抑えられるようになってしまったのである。

筆者は、中山正善二代真柱を「父親」のように心から尊敬し、その業績を高く評価している。しかし、いつまでも故人の枠の中に閉じこもり、引用ばかりしているようでは、教学・思想の発展は望めないであろう。むしろ偉大なる父親というものは、子供が力を蓄えて、自らを批判的に超えてゆくことをこそ、喜ぶのではなからうか。

また小生にとって、天理教学思想の面で現教典を越える努力をすることは、「経験科学」としての宗教学の限界に挑戦することとも連動している。恩師故岸本英夫教授もまた、小生にとり、乗り越えるべき偉大な父親なのである。(昭和60年9月19日記)